

## 4月例会報告

【日時・会場】2001年4月27日(金)19:15～21:15 筑波大学附属高校会議室～1:30 カリンカ

【参加者(会員)】荒井義行(毎日新聞) 井上俊也(NTT 東日本) 小金丸浩志(京華高校) 五香純典(筑波大学大学院) 中塚義実(筑波大学附属高校) 宮崎雄司((有)オフィス・アステカ代表/サッカーマニア編集長)

【参加者(未会員)】上間匠(東京大学ア式蹴球部員) 江添誠(京華高校) 北原由(多摩工業高校) 奈蔵清之(豊島学院高校) 半澤隆憲(海城高校)

注)参加者は、所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

本報告は、月例会での発表とディスカッションの内容を中塚義実がまとめ、参加者の確認を経て公開するものである。今回の発表は、7月22日に予定されている「コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム」の内容でもあり、詳細については、後日まとめられる報告書を参照していただきたい。

ユースサッカーは変わるか？

ーDUOリーグのあゆみと東京都ユースリーグの展望及び学校運動部のクラブ化について  
中塚義実(筑波大学附属高校/DUOリーグチェアマン)

東京都文京区・豊島区の高校サッカー部、クラブユースではじめたDUOリーグも、今年で6年目のシーズンに突入した。年々進化するDUOリーグの、発足から今日に至るまでの経緯と現在の状況、東京都ユースサッカーリーグ創設へ向けての動きと展望、さらに、筑波大学附属高校サッカー部が取り組んでいる「学校運動部のクラブ化」について紹介された。

本報告は、当日の発表内容・資料とディスカッションの内容を、発表者自らが再構成して報告するものである。資料は、「高校サッカーを考える会会報第3号」(平成13年3月16日発行)に掲載された「ユース年代のサッカー環境を見直そうー底辺からのリーグシステム導入を」、及び月刊『体育科教育』2001年6月号に掲載予定の「"スポーツ"の側から学校運動部を見直そう！」等である。

なおこの回は、東京都高体連サッカー科学研究会との共同開催であった。いつもより学校の先生が多いのはそのためである。

## <全体構成>

<1>DUO リーグとは

<2>DUO リーグ 5年間の歩み

<3>DUO リーグの成果

<4>東京都ユースサッカーリーグ創設へ向けて

<5>筑波大学附属高校サッカー部の近況

<ディスカッション>

<1>DUO リーグとは

### 1. DUO リーグ概要

DUO リーグは、文京区・豊島区の高校運動部とクラブチームによるユースサッカーリーグである。東京都高体連の第2地区が母体になっている(DUO の名称もここに由来する)が、あくまでも私的なリーグとして1996年度よりはじめられた。

初年度前期リーグは、高体連5、JCY(日本クラブユース連盟)1の、計6つのクラブから10チームが出たの1リーグ制であった。それが2000年度後期リーグでは、高体連12、JCY1(三菱養和)、それに文京区と豊島区の中学生選抜が加わり、1部8チームと2部8チーム×2リーグの計24チーム。人数の多いクラブからは複数チームの参加が可能だし、複数クラブからの連合チームでもかまわない。試合の際に必ず大人が付添うことと、審判が確保できる(高校生が笛を吹くことを奨励している)こと、そして大会参加費を各期18,000円支払うことが、各チームに科せられた義務である。参加費は審判や運営等の経費となる。優秀審判賞をはじめ、ささえる活動に対する評価は惜しまない。

学校行事や高体連等の大会の合間を縫って、前期は4~7月、後期は9~12月と期間を決めて行っている。これにより、1~3月がオフシーズン、プレシーズンとなり、年間を通しての活動サイクルが確立する。もちろん週末のゲームは、1週間単位の活動サイクルの基盤でもある。実際には、予定していたゲームが雨で流れたりして、7月末や12月末に一気に消化することも多い。

ゲームの結果が「DUO リーグ通信」で伝えられるこのリーグが、DUO リーガー(高校生)の自覚とレベルを上げていることに疑いの余地はない。

### 2. DUO リーグの理念

「ユース年代にリーグ戦を」との考えは、「チーム」と「選手」しか育ててこなかった従来の学校運動部への反省から生まれている。それは「本来のスポーツを取り戻す」ことであり、「クラブ」と「プレーヤー」及びそれを取り巻く多様な人材を育てる試みである。

定着させたい「意識」と「習慣」を「DUO リーグの理念」にまとめた。

## 1) サッカーの生活化

- ・日常生活にサッカーが無理なく位置づけられる
  - ・シーズンが明確になる
  - ・3年間の高校生活の中にサッカーが無理なく位置づけられる

## 2) 定期的な試合の場の確保

- ・誰もがゲームに参加できる
- ・練習への動機づけとなる
- ・「リーグ戦」が経験できる

## 3) レベルに応じた受け皿づくり

- ・同程度の相手と切磋琢磨できる
- ・レベルやニーズごとの受け皿がある

## 4) サッカーをささえる人材の育成

- ・「スポーツの主人公」を育てる
- ・ピッチを取り巻く多様な人材を育てる

### < 2 > DUO リーグ 5年間の歩み

毎年度ごとに「活動方針」を掲げながら、徐々に形を作ってきた。96年度から2001年度までを概観すると以下のようなになる。

#### ●1996年度…DUO リーグ発足

後期には以下の出来事があった。

- ・文京区中3選抜が後期のみ参加。中3の活動の場となる(現在も)
- ・筑波大学附属高校と京華高校の2軍が連合軍で参加
- ・特別枠選手制度導入。19歳以上も3名まで出場可。これによりOBや教員(!)が出場できる
- ・大会参加費を徴収(1チームあたり15,000円：当時)

大会参加費の徴収をめぐるのは、筑波大学附属高校でひとしきり議論になった。「前期タダだったのになぜ後期からお金が要るのか」という疑問が部員から出てきたのが発端である。「高体連の大会はタダなのになぜDUOリーグはタダでないのか」という疑問もあったが、高体連の大会では学校が参加費を出してくれるので、「タダではない」ことを部員が知らなかっただけである。スポーツをするためにいろんな人

がささえてくれていること、しかし日本では、そのほとんどを教師の無償のボランティアに頼っているということもこの機会に話した。理屈では納得しても感覚で納得できない生徒たちも、「1,000円で7試合もゲームが楽しめるのは安いと思わんか？」の一言で納得した。Jリーグ観戦よりも、映画鑑賞よりも、ディズニーランドに行くのよりも、「サッカーをする」ことがはるかに安く設定されていることに気づいた生徒たちは、「参加費は仕事をした人に配分される」ことを話すと納得し、その後も自分のこづかいから出している。

●1997年度…より良いサッカー環境を構築し、全国へ情報発信する

JFAnewsの連載「ユース年代のサッカーはいま」(No.164・165,1997.1・2)でDUOリーグを紹介。

●1998年度…1) 普遍性の追求＝どこでもできるようにシステム化

2) DUOリーグの発展＝より良いサッカー環境の構築

後期リーグで1位から最下位まで順位をつけ、これをもとに次年度前期から本格的1,2部制導入

●1999年度…1) レベルに応じた環境づくりー入れ替え制度

2) リーグ単位の自主運営制度

リーグを「個人」ではなく「組織」で運営する体制を整える

●2000年度…2001年度より「東京都ユースサッカーリーグ」を創設すべく行動を開始する

そのために、

1) リーグ戦プログラムをつくる

2) 前期に「フレッシュマンリーグ」をつくり1年生の受け皿とする

3) 審判講習会を開催する

4) DUOリーグ選抜の活動を行う

5) 業務の統合と分担を進める

DUOリーガーの個人登録制度開始。東京都全域へ広める上での諸制度を整備し、いくつかの新規事業に取り組んだ。

●2001年度…1) 東京都ユースサッカーリーグを早期に実現すべく行動を継続する

2) DUOリーグ"IT革命"元年とする

3) "FCDUO"構想の可能性について検討する

東京都サッカー協会(TFA)理事会においてユースリーグ創設の方向性が支持され、TFA第2種委員会で準備を進めることとなったのは2000年6月。しかし、その後は話が前に進まない。そこで2001年度より、高体連の地区ごとに「準備委員」を出してもらい、そこが中心になって準備を進めることとした(責任者は中塚)。

"IT革命"では、DUOリーグのホームページを立ち上げるべく準備を進めている。

"FCDUO"は、ユースリーグである DUO リーグの卒業生による第 1 種のトップチームを作る構想である。学校運動部にはそれぞれの OB 会もあるので、「FCDUO 構想」がどこまで受け入れられるか、そもそもこのようなニーズはあるのかを検討するのが本年度のテーマでもある。

### < 3 > DUO リーグの成果

1. DUO クラブの増加="同志"の輪の広がり…他地域への波及も
2. リーグ構成単位(会員)の明確化…メンバーシップの確立
3. リーグシステムの確立…1,2 部制、年間スケジュールの確立など
4. マネジメントシステムの確立…業務の統合と分担
5. リーグ内の情報交換システムの確立…DUO リーグ通信の活用(スポーツ店でも掲示)
6. リーグ外への情報発信…指導者講習会・学会・雑誌等で紹介。本年度は IT 革命がテーマ
7. DUO リーグ会議の定期的開催…高校生も参加・発言する会議。ささえることを実感する場
8. レベルアップ…各クラブの代表チームの活躍(高体連、クラブユースとも)
9. その他…ささえる人材の育成など

以上の各項目について簡単に説明したが、ここでは「リーグ構成単位の明確化」のみ示す。いわゆる「登録制度」に関する DUO リーグの試みは、これからの競技団体のモデルとなるはずである。

#### ●リーグ構成単位(会員)の明確化

どういう単位で登録(加盟・加入)するのかは、リーグが何を育てるのかといった基本的な理念と連動している。育てたいのは、多様なレベルやニーズの受け皿としての"クラブ"であり、その構成員としての自立した"プレーヤー"である。従って、DUO リーグの構成単位は、加盟団体が"クラブ"、会員は個々の"プレーヤー"となる。彼らは"会費"を払ってリーグの構成員としての責任を果たすことによってメンバーとなり、リーグ戦に参加する"チーム"を組織する権利が与えられる。Give and Take がベースである。

DUO リーグでは、加盟クラブを「DUO クラブ」と呼んでいる。年 5,000 円の"会費"を支払ってメンバーになる(2001 年度より徴収開始)。会費は DUO リーグの運営資金(管理費)に充てられる(この金額からみて、基本的に運営は全てボランティアであることがわかる)。

各 DUO クラブのプレーヤーを「DUO リーガー」と呼ぶ。2000 年度から、年 500 円の"会費"を払って DUO リーガーとなる制度が取り入れられた。DUO リーガーには「DUO リーグプログラム」が無料で配布される。「DUO リーグプログラム」は一部 400 円で販売されているので、前後期分が無料で入手できることは金額の上でもお得である。

クラブとプレーヤーが DUO リーグの構成員であり、メンバーである。これに 2001 年度からは「賛助会員」という枠も設けられ、理念に賛同する個人または法人も会員になることができるようにした。プレーヤーではないが、スポンサーとしてささえてくれる人や団体に仲間になってもらおうという考えである。

これらのメンバーによって、DUO リーグという組織が運営される。いずれ人を雇うことになった場合、人件費はメンバーからの"会費"でまかなわれるのが原則である。

「管理費」はメンバーの会費から、「事業費」は各事業に参加する者の受益者負担が原則である。例えば「審判講習会」という事業に参加する"個人"は"参加費"を払う。同じように、前期リーグ、後期リーグに参加する"チーム"は各期ごとにエントリーし、それぞれ 18,000 円の"参加費"を払う。2 チーム参加するクラブからは 2 チーム分徴収する(当たり前)。原則は、参加費収入の範囲内でリーグ戦という事業が運営されるということである。"チーム"に課せられた義務—参加費を払うこと、大人が必ず付添うこと、審判を確保すること、指定された試合を必ず行うこと—は全て、試合を行うための義務である。

"メンバーシップ"と"大会へのエントリー"を整理し、"会費"と"参加費"を区別することは、"クラブ"と"チーム"を整理することでもある。日本の競技団体は「大会運営や」として始まっているので、"会費"と"参加費"がごちゃ混ぜになった形で"登録料"として徴収されていることが多い。ささえるという発想を育てるためにも、ここは整理して考えたい。これらの考え方は、大会参加だけの登録に陥りがちな従来の競技団体のあり方に対する提案でもある。

#### < 4 > 東京都ユースサッカーリーグ創設へ向けて

2001 年度より、東京都高体連の各地区より「ユースリーグ設立準備委員」を選出してもらい、そこが中心になって検討を開始したのは前述のとおり。いずれはクラブユースの代表者や自治体、民間の方にも入ってもらい、検討結果を協会に上げていきたいと考える。

関東スーパーリーグ(強豪高同士の練習試合を組織化した任意のリーグ戦)が 2002 年度より、関東協会主催の公式リーグ戦となる。末端の DUO リーグから関東リーグまで、階層的なリーグシステムを整備していく必要があるし、この 1 年で少なくとも骨格だけでも作っておきたいというのが今の状況である。仕上がりイメージは、以前にも提示したとおりである。

1. 衛星型サッカー環境の構築…レベルに応じてより広い範囲を網羅する階層的リーグ構造
2. 年間スケジュールの確立…シーズンを明確化すること。リーグの合間にカップ戦がある仕組み
3. 他種目を含めたスポーツのシーズン制…他種目にもリーグ創設を働きかけ、マルチスポーツライフが可能となるよう受け皿を用意すること
4. 地域に根ざしたスポーツクラブへ…リーグ自体が一つの「クラブ」となり得る。

#### < 5 > 筑波大学附属高校サッカー部の近況

ところで、筑波大学附属高校サッカー部も、以前月例会で報告した時点から様々な変化を経験し、今また変化の真っ只中にある。95 年頃からのいくつかの改革について、資料より抜粋しながら紹介したい。

1. 引退なしのスポーツライフ(略)
2. DUO リーグの創設(略)
3. 部員資格の見直し(96~97年度)

これまでサッカー部は、学校において唯一公認された"サッカーチーム"であったが、部員以外にもサッカー好きは沢山いる。また、ある曜日だけ練習に出られなくなった部員が仲間でなくなるというのもおかしいのではないか(これまでも「サッカーが好き」であることを掲げてはいたが、実際は「サッカー部の活動に欠かさず顔を出す」ことが最重要項目であった)。こうして部員資格の見直しがはじまり、「サッカーが好き」であることをまず第一に強調することとなった。競技志向からレジャー志向まで「するのが好き」な者だけでなく、「みるのが好き」な者や「伝えるのが好き」な者を幅広く受け入れられるだけの枠組みができた。学校を代表する"選手"による"サッカーチーム"から一歩踏み出して、サッカー好きが集まる"サッカークラブ"への歩みをはじめたのである。

実質的には何も変わらなかった。しかし、サッカー部の退部者が「フットサル同好会設立運動」を起こし、それが頓挫したことをきっかけに、新たな動きが始まった。

4. 競技志向の「サッカー部門」と、レジャー志向の「フットサル部門」の創設(97年度)

部に入ってまではやりたくないが、昼休みに遊びでやるよりはきちんとした形でフットサルを楽しみたい。そう思った彼らの設立運動が失敗に終わったのは、身内のフットサル"チーム"を同好会として認めてもらおうとしただけで、仲間の輪を広げることをしなかったからである。

サッカーやフットサルを気軽に楽しみたい生徒はたくさんいる。部員資格の見直しは、全てのサッカー好きが仲間になろうということであったはずである。フットサル同好会の発起人は中塚の提案を受け入れ、サッカー部のミーティングに出席して「サッカークラブの仲間に入れてくれ」と呼びかけた。具体的には、サッカー部(サッカークラブ)内に「フットサル部門」を設け、メンバーが活動を選択できるようにしようというものである。

この申し入れに対し、当初、部員の反応は冷ややかであった。「部の秩序が乱れるだけで、自分たちにとってのメリットがない」「一度退部した者が今更仲間に入れてくれというのも虫が好すぎる」などである。しかし話を進めていくうちに、「サッカーが好きな人の活動の場をつくろう」「いろんな人が集まるサッカー"クラブ"というのもおもしろそうだ」という機運が芽生えた。

こうして 97 年度中に、サッカー好きの集団である「サッカークラブ」の中に、競技志向の「サッカー部門」とレジャー志向の「フットサル部門」が共存する形となったのである。

5. 校内フットサル大会の開催(98年度~)とフットサル部門の活性化(2001年度)

98年の6月頃、ワールドカップ・フランス大会の影響か、昼休みのグラウンドはサッカーを楽しむ者であふれかえっていた。いよいよフットサル部門の出番である。「第1回桐陰フットサル・ワールドカップ」と称する校内フットサル大会を開催し、大成功のうちに幕を閉じた。優勝チームを全校集会で表彰し、副

賞としてサッカー部の入部届を贈った。その後も年 2 回のフットサル大会は校内に定着し、毎回男子約 20 チーム、女子約 10 チームがエントリーし、昼休みにグラウンドでフットサルをやっている。

フットサル大会の成功はあるものの、フットサル部門はなかなか活性化しない。「草サッカーならどこでもできる。なぜサッカー部の下に入らないといけないのか」「定期的な活動は不要。やりたいときにやればいい」「強制されるような感じでいや」と主張するフットサル愛好者を組織化する力は、高校生にはない。フットサル部門は、年 2 回のフットサル大会の時だけ顕在化するバーチャル部門になっていた。

そこへやって来たのが 2001 年度の新生。当初「フットサル同好会をつくりたい」と言っていた彼らも、過去の経緯を知り、サッカー好きの集団である「サッカークラブ」の意義も理解して、サッカークラブのフットサル部門として約 10 名が活動している。今後は楽しみである。

#### 6. 曜日制部員制度の導入(99 年度)

一方、競技志向のサッカー部門の方は、競技力は高まらず、部員数も減少傾向にあった。なぜ仲間が増えないのか。ミーティングで議論した結果、99 年 10 月より新たに「シーズン制部員」と「曜日制部員」の制度を導入することとなった。

学校運動部は多くの場合、1 年次に入部すると 3 年間同じ部に所属することを前提としている。実はここが大きなハードルになっているのではないかと。サッカーも好きだが、本当はバスケもバレーも好きなのである。「シーズン制部員」制度を導入することにより、例えば DUO リーグの前期シーズンはサッカー部で活動するが後期は別のことがやりたい者を受け入れられるのではないかと。また、週 4 日の練習全部は出られないが、週 1 回は競技志向の人たちとサッカーをやりたい者も大勢いるのではないかと。こういった問題意識が「シーズン制部員」「曜日制部員」制度導入の背景にあり、そのような話を部員に少ししてみたところ乗ってきて、制度の枠組みを作り、生徒部の了解を得て募集を開始した。

「シーズン制部員」の反響は特になかったが、「曜日制部員」の方は反響があった。フットサル部門に行ったきり活動休止状態に陥っていた元サッカー部員が何人か再生したし、中学の時にサッカーをやっていた者も数人が「月曜部員」となった。今も数名が曜日制部員として活動している。

#### 7. 女子部門の創設(2000 年度)

2000 年度には女子部員が 6 名入部してきた。初心者からはじめた彼女たちは熱心に練習に取り組み、めきめき上達している。初の練習試合は、避難生活を送っていた三宅高校と、秋川高校体育館で行った。2 月には「東京都女子フットサル大会」に出場、3 連敗に終わったが 1 点取って、ますます張り切っている。

4 月になって新入部員も 4 名加わり、フットサルを中心に活動している。今後は楽しみである。

<ディスカッション>



## ●チームとクラブについて

- ・チームとクラブというのは、大学で体育会とサークルがある構図と同じと考えれば理解しやすい
- ・ケンブリッジ大学にはクラス単位のラグビーチームがたくさんある。その選抜チームがケンブリッジ大学として試合に出る。高校でも価値観が多様化してきているので、このようなことができるのではないかな。例えば、野球部が DUO リーグに参加するというのもあっていいのではないかな

- ・可能だが、参加チームの資格(審判の確保や大人の付添い等)をクリアできるかどうかが問題。むしろ各クラブ(各学校)で、クラブ内の対抗戦(校内対抗戦)をやらせてもらえると良いのではないかな。

- ・代表チームは学校中のサッカータレントで組織する形が理想だろう。今はサッカータレントがバスケットボール部にいたり、どこにも所属していなかったりすることがある。必ずしもサッカー部がベストとは限らない

- ・昔の学校はクラブそのものとも言える。筑波大学附属高校では、柔道部や蹴球部は「桐陰会」に属していた。「桐陰会」は OB も含んだ組織であり、クラブであった。高校生の柔道チームやサッカーチームはそこに含まれるという形である。どこかで種目の壁や年代の壁ができたのだろう。いろんな制度がきちんと整ってきたことによる弊害だろうか

- ・OB チームに他の学校の卒業生が入ってきてクラブ化する例はいくつもある。エリースや九曜クラブなどもそう。こういうのを DUO リーグという単位でできないかというのが"FCDUO"構想。

- ・DUO リーグでも大部分はチーム＝クラブ。これらを一まとめにして第 1 種のチームを作ればいいというのが"FCDUO"構想。DUO リーグ選抜の活動は、"FCDUO"にもつながっていくだろう。この構想のもとでは、DUO リーグは"FCDUO"のユースチームがリーグ戦を行っているという位置づけになる。

- ・水泳では日大や早稲田がこういう仕組みになっている。ユナイテッドとついている外国のクラブも同じである。まっとうな発想だと思うが、これが学校という仕組みとどうすり合うのかが課題

## ●学校の枠について

- ・昔は、学校の枠はそれほどきつくなかった。厳しくなっていく背景には、事故があった時の責任問題が大きいのではないかな。学校管理下にある者に対してしか責任を負えない。だから学校単位になってしまう

- ・顧問の先生がつかないと試合もできない。素人の顧問よりもサッカーの勉強した外部の方がスポーツ的にいうと良い。しかし、学校的には違う

- ・外部指導員の制度が取り入れられている。都立の学校でも、例えば田無工業がジョージ・トレドを半年間使うなど、いくつか例がある。都立高校の場合、保護者会が責任を持つという形で遠征に出かけることもある。保護者会が募って、たまたま同じ学校の生徒が集まったという形にするなど。

## ●高校生にとって選択肢が増えることの意味

- ・我々大人は 10～20 年先を考えるが、当事者としての高校生は 3 年間の存在。選択肢が増えたことが本

当に高校生活 3 年間にとっていいことなのか。

- ・選択できるには自立していることが前提。所詮高校生であり、楽な方に流れるし、そのとき思っただけということもある。だから、選択肢が増えるのがいいのかどうかは何とも言えない。しかし、選択肢を活用できる、自立した存在になってほしいというのはある
- ・最終的な目標は、関わる人が高いモチベーションを持って豊かなスポーツライフをつくれるかどうかにある

#### ●高校生のフットサル

- ・京華高校では文化祭企画で校内フットサル大会をやっている。今年度は、他の学校でやっている校内大会の代表を招待する形でできないかと検討している。校長の許可も得ており、京華高校文化祭での「フットサルワールドカップ」開催の可能性は高い
- ・DUO リーグのフットサル版ができると面白い
- ・東京協会では第 2 種のフットサル大会を本年度より開催する。高校生の潜在的フットサル熱は高い
- ・高校生にはまだ企画力がない。筑波ではできるかもしれないが、大人が企画してあげることも必要。

#### ●活動経費について

- ・高いレベルに行くほどお金がかかる。例えば大学では、東京都サッカーリーグに参加するのに 1 チーム 30 万円かかる。これが関東に上がると 200 万になる。各事業を受益者負担でというのには限界があるように思う。

・かつてのアマチュアリズムがそうであったように、受益者負担だけでは「豊かな人しかスポーツできない」ことになってしまう。メンバーの範囲を広げて、理念に賛同する人や企業などの「賛助会員」にささえてもらうことが必要だろう。しかし、企業がこけたら皆こけたようになるようではだめ。

- ・学校の部活動には生徒会や後援会からもお金が入る。額は学校によってまちまち
- ・最近は大会ごとに指定球があるので、会場校になるとそれが支給される

#### ●その他

- ・熱心な先生がいるとできるが、いないとできない。東京都全体に広げていく時に課題となるのは施設と人。誰が中心になって進めていくのかが大きな課題。

#### <感想・意見(中塚義実)>

今回は自分の発表なので、感想はむしろ参加者、あるいは会員の方にお聞きしたいのだが、一つだけ言うと、サロン 2002 も DUO リーグも方法論は同じであり、抱えている課題も同じということである。"志"に賛同する会員で構成されるサロン 2002、"理念"に賛同する会員で構成される DUO リーグ。いずれも課題は、組織の一員としての自覚の問題であり、当事者意識の程度の問題。「組織とはあなた自身のことですよ」ということが、実感を伴って自覚できるかどうかである。

「DUO リーグに入ればゲームができる」というだけの発想ならむしろお断り。メンバーになるとは、そこで自分に何が出来るかを具体的に考え、行動することである。DUO リーグの場合はライン引きでも審判でも何でもいい。為すべきことは比較的明確で、サッカーのプレーができるようにするための準備の話である。わかりやすい。ではサロン 2002 の場合は…？

これは会員自らお考えいただきたい。もちろん直接的な、短期的な Give and Take を求めているわけではありません。けど、無関心、無関係では困ります。

自分の指導現場での実践には自信があるし、いろんなところに紹介したいと思っている。しかしながら、現場は刻一刻と変化しており、今起きていることを「伝えたい」気持ちがある反面、「伝えている場合ではない」というものもある。"現場"はいつもおもしろい。だからやめられない。